

【書評】

河野龍也 『佐藤春夫と大正日本の感性——「物語」を超えて』

坂 口 周

春夫愛を語ってやまない著者による渾身の研究である。

前半は初期作品の分析から「虚構のフルサト」の希求という春夫の創作根柢を押さえた上で、ゲートル由来の「世界文学」の一員として自我形成を果たす理想と、それを突き崩す（自然）の客体性あるいは身体的無意識への欲求とが、代表作『田園の憂鬱』において葛藤する様を描き出す。同様に、植民地台湾を舞台とした「女誠扇綺譚」において、世界市民の普遍的表象に身を委ねたい「私」の欺瞞に、亀裂を生じさせる他者の現前性を取り出してみせる。春夫が一九二一年を転機として「私小説」的作風へ移行するのも、こうした葛藤を経て、「詩」を毀損する散文芸術のリアルな力に優位性を見るようになったからだ。

こう要約してしまえば、議論の構図は明瞭である。だが、

読み進めるうちに本書を貫く断層が浮かび始め、前後半の間の大きな転調としてそれを経験することになる。専ら（語り）から抽出する「春夫」の現象学的な分析と、史料から彼の行動の逐一の特定を目指す実証研究の分裂。これは一種の「転移」である。春夫の葛藤を著者自身で引き受けて、それが議論の全体構成に適用されている循環が、本書の分裂を有効な研究方法として肯定するのだ。その意味で「渾身の書なのである。

したがって読者は、『田園の憂鬱』論と南方紀行論を架橋する「女誠扇綺譚」論に白眉を見るはずだ。安易に理論用語を借用することなく、テクストの「沈黙」の意味を史料読解と現地調査から導き出す鮮やかさは、同作の探偵小説的な読み物としては否定できない退屈さを補って余りあ

る。

私的関心に照らせば、一世紀前の「世界文学」を（詩の国）として理想化するアナクロニズムに関わる議論が参考になった。また本書で唯一の物足りなさもここに感じる。「風流」論に至って春夫の「詩」の位置づけは半捻りの転換が認められ、詩的境地から「世界」が脱落した（あるいは「小説」の側に振り分けられた）ように見えるのだが、その思考の経緯が判然としなかった。南方旅行を経て、春夫にとつての「世界」の外延が変わったからか、それとも「私小説」が古の理想的「世界」を吸収したからか。何にしても、その相克は「春夫独特のアイロニー」に留まらないはずで、今後は他の作家のテクストとの関係性に考察を移して欲しいのが本音なのだが、人の「愛」に口出しするのは野暮かもしれない。

広義の作家研究は、読解に混乱を来しても「作家」という「闇」を通過させれば、どのようにも説明できてしまう点で逆にエクスキューズとなる危うさがつきまとう。著者のいう「存在論」への踏み込みは決して魔法の関数の発見ではないことを自覚する必要があるし、誘惑を振り切るのには容易ではない。その意味で、本書は間違いなく希有の達成なのである。

（さかぐち しゅう・福岡女子大学准教授）